

2026年7月2日（木） | 環境省北海道環境パートナーシップオフィス 行政職員向け勉強会

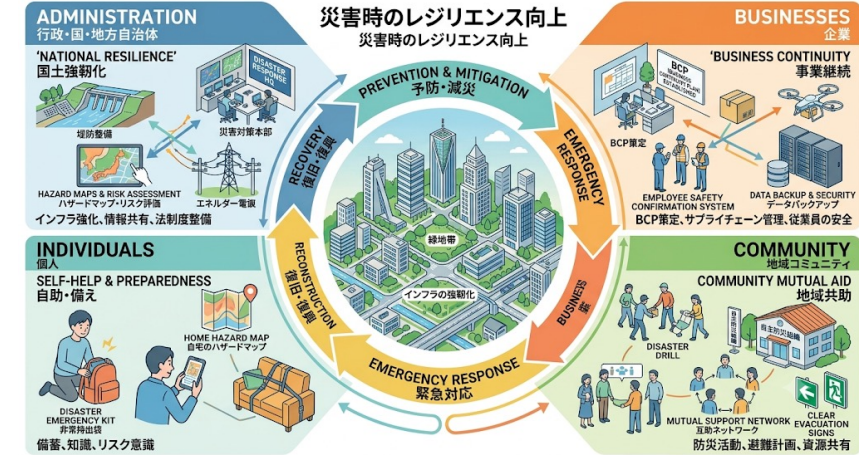
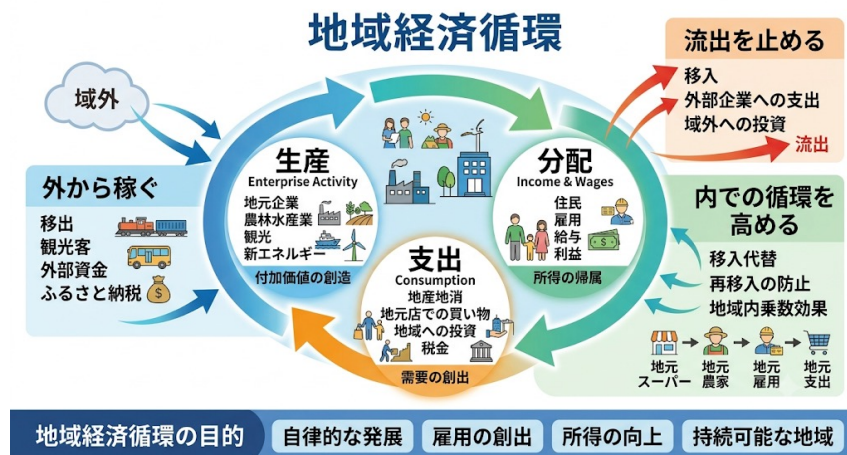
地域と再エネのよりよい関係を描く — 合意形成を支えるゾーニング設計 —

古屋将太（環境エネルギー政策研究所）

本日のお話し

1. 再エネ導入と合意形成
2. 北海道浦幌町の再エネゾーニングとプロセス
3. まとめと今後の課題

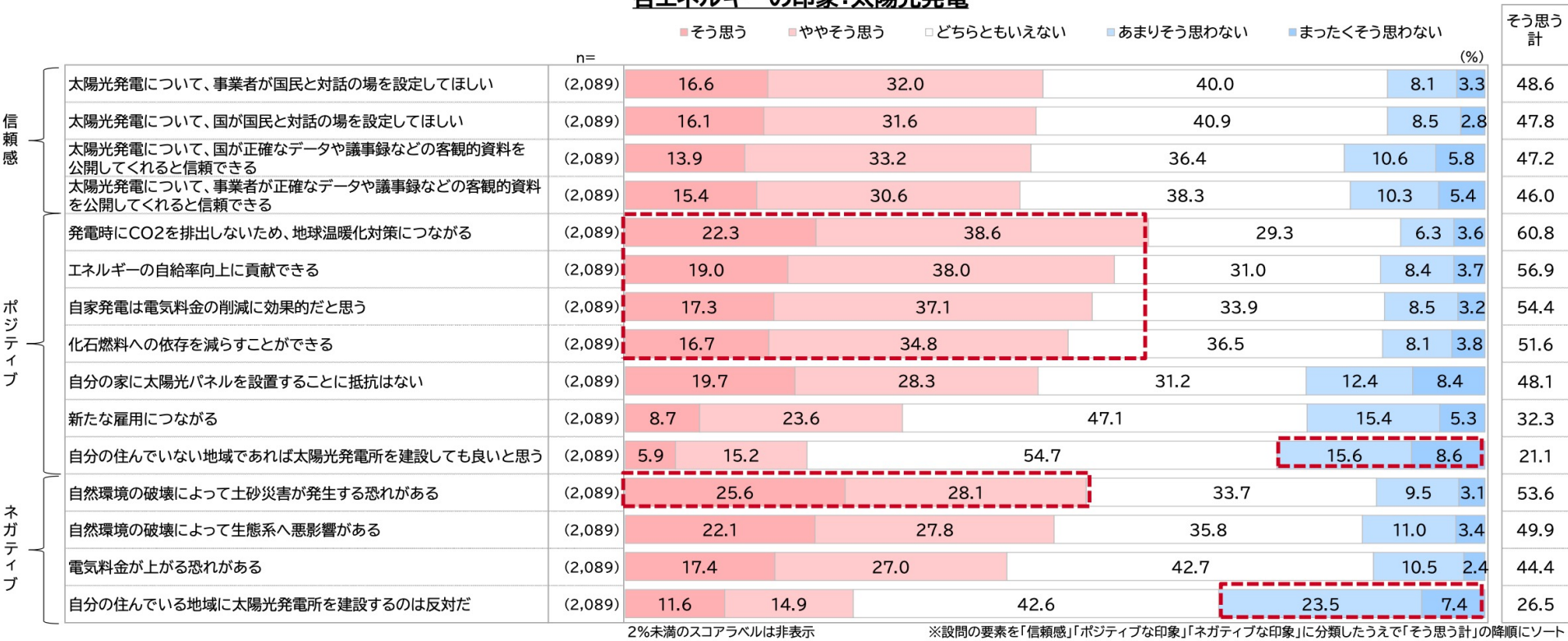
1. 再エネ導入と合意形成：なぜ再エネ導入が必要か？



1. 再エネ導入と合意形成：なぜ再エネ導入が進まないのか？

太陽光発電のメリットは理解しているが、ネガティブな影響は懸念し、必ずしもジブンゴトではない

各エネルギーの印象:太陽光発電

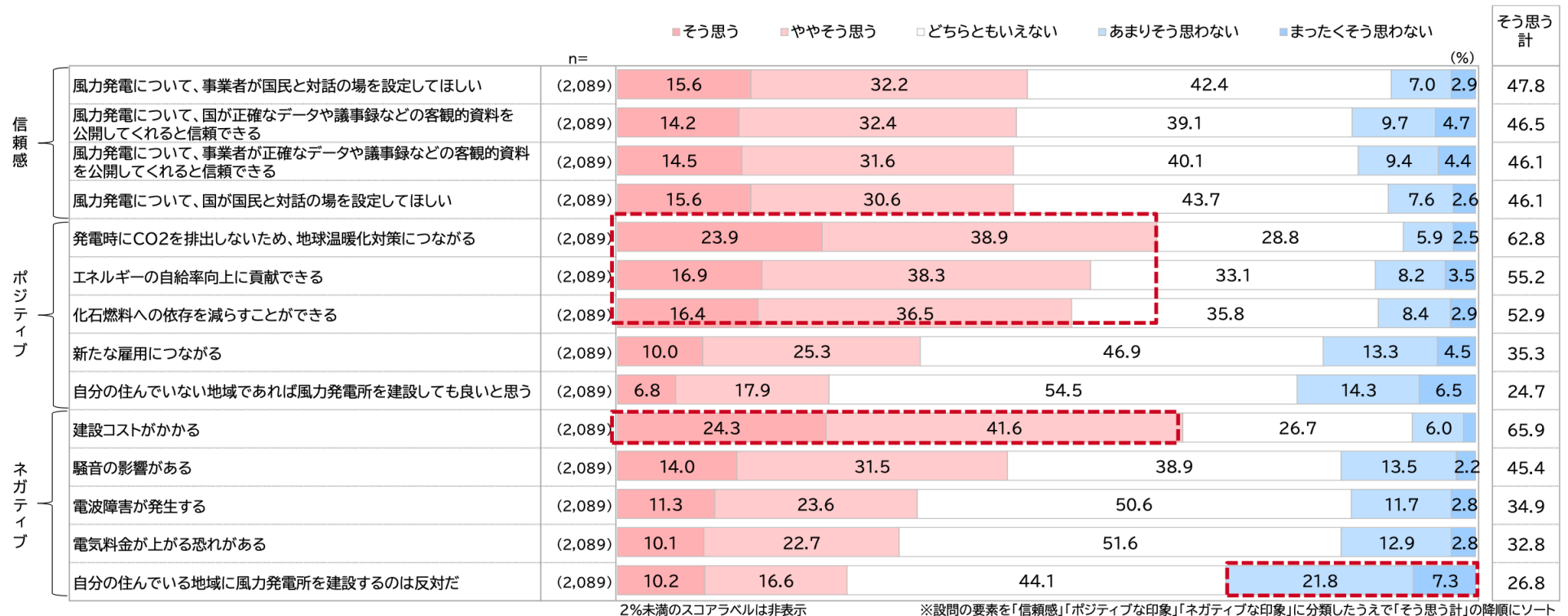


出典：SOMPOインスティテュート・プラス株式会社（2025）「エネルギー政策に係るアンケート調査結果」／オンラインモニター 全国の20～79歳の男女 2,089サンプル、実施 2025年1月6日（月）～1月8日（水）

1. 再エネ導入と合意形成：なぜ再エネ導入が進まないのか？

風力発電のメリットは理解しているが、特にコストへの懸念が大きく、必ずしもジブンゴトではない

各エネルギーの印象：風力発電



2%未満のスコアは非表示

※設問の要素を「信頼感」「ポジティブな印象」「ネガティブな印象」に分類したうえで「そう思う計」の降順にソート

1. 再エネ導入と合意形成：なぜ再エネ導入が進まないのか？

Energy Policy 175 (2023) 113495

Contents lists available at ScienceDirect

Energy Policy

journal homepage: www.elsevier.com/locate/enpol

ELSEVIER

The mega solar Twitter discourse in Japan: Engaged opponents and silent proponents

Christian Doedt*, Yasushi Maruyama

Nagoya University, Graduate School of Environmental Studies, Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya, 464-8601, Japan

ARTICLE INFO

Keywords:
Social acceptance
Social media
Twitter
Mega solar
Online communication
Social network and content analysis

ABSTRACT

Social media is used by many for information gathering and sharing nowadays. Public opinion and risk perception are increasingly being shaped online. These online discourses provide valuable insight into the concerns and expectations of its users. This study analyzed more than 50,000 tweets to identify the attitude, locality, and concerns about large-scale solar photovoltaic, so-called mega solar, projects in Japan. The results show that the Twitter discourse is dominated by mega solar opponents who are especially concerned about the negative environmental impact of the projects, as well as the trustworthiness of politicians, developers, and experts. The concerns are not limited to specific local projects but mega solar is often generally dismissed as a suitable energy source in Japan. Twitter allows opinion leaders to reach a large audience with unvetted and biased negative information about mega solar. The lack of opinions that challenge these pre-existing group beliefs indicates the existence of an echo chamber. The currently silent supporters are advised to embrace social media to balance the one-sided discourse and build trust through transparency and engagement with concerned stakeholders.

1. Introduction

The Japanese government announced in October 2020 that it will aim to achieve carbon neutrality by 2050. At the time of the announcement, the share of non-renewable energy in electricity generation in Japan was still over 80% (Ministry of Economy, Trade and Industry, 2022). The Strategic Energy Plan was revised in 2021 to set the path for decarbonization in the energy sector. A share of 36–38% of renewable energy by 2030, including 14–16% from solar PV, was set as a target. In other words, in just nine years the current 8.5% of solar PV must almost be doubled (Ministry of Economy, Trade and Industry, 2021).

This energy transition is a substantial technological transformation. Through the decentralized nature of renewable energies, many people will be directly affected by this development. Thus, it also has a considerable social impact (Meadowcroft, 2011). Social acceptance on a national and local level is crucial for the success of the transformation (Wüstenhagen et al., 2007).

However, ground-mounted solar photovoltaic (PV) projects are increasingly causing opposition in Japan. Especially solar PV projects with a capacity over 1 MW, so-called mega solar projects, are triggering

conflicts. According to a study of newspaper articles about large-scale solar PV in Japan, the main concerns of local stakeholders are the fear of disaster, in particular landslides, caused by the projects, negative impact on the visual landscape, negative impact on the living environment, such as the reflection of solar panels, and concerns about the local environmental impact (Yamashita and Maruyama, 2022).

Research about large-scale renewable energy projects like wind turbines has also shown that not only tangible concerns are negatively impacting social acceptance, but that the planning process and the distribution of risks and benefits are also crucial factors (Gross, 2007). Most of those large-scale solar PV projects in Japan are owned by extra-prefectural or foreign companies (Maruyama, 2022) that neglect community engagement (Fraser and Chapman, 2018).

Engagement and deliberative dialogue are necessary to guarantee fair planning processes. In this context, a general agreement on basic facts must be the foundation for discussion on the risks and benefits of projects. However, constructive debates become increasingly difficult in a “post-truth” era in which arguments are more likely accepted based on their emotions and personal beliefs rather than on scientifically based information (McIntyre, 2018).

The global tendency of increasing anti-elitism is also present in

* Corresponding author.
E-mail address: doedt.christian.57@u.nagoya-u.ac.jp (C. Doedt).

<https://doi.org/10.1016/j.enpol.2023.113495>
Received 10 October 2022; Received in revised form 10 January 2023; Accepted 11 February 2023
Available online 19 February 2023
0301-4215/© 2023 Elsevier Ltd. All rights reserved.

ネガティブな情報は急速かつ大量に広がる

Doedt, C., & Maruyama, Y. (2023) The mega solar Twitter discourse in Japan: Engaged opponents and silent proponents. *Energy Policy*, 175, 113495.

- 日本のメガソーラーに関するTwitter上の議論は、主に反対派によって支配されており、環境破壊や政治家・開発業者・専門家への不信が大きな懸念となっている
- 反対意見は特定地域の案件に限られず、メガソーラーを日本のエネルギー源として一般的に否定する傾向が強く、約6割の否定的ツイートは全国的・一般的な話題を扱っている。
- 主な懸念は環境破壊と不信であり、特に地滑りなどの安全性、森林伐採、外資系事業者による地域住民無視の計画プロセスなどが批判される
- Twitterでは精査されないままの偏った否定的情報がオピニオンリーダーから広く拡散され、異論がほとんど見られない「エコーチェンバー」が形成されている

1. 再エネ導入と合意形成：なぜ再エネ導入が進まないのか？



富永愛 Ai Tominaga

@Ai_Tominaga

なんで貴重な生態系のある釧路湿原にメガソーラー建設しなきゃならないのか誰か教えて欲しい。

午後8:57 · 2025年7月2日 · 5,212.4万 件の表示

2,584

5.2万

29万

5,553



【NNNドキュメント】メガソーラーと希少生物の命 釧路湿原を脅かすエネルギーの課題 NNN セレクション

すべて 提供: 日テレNEWS 世界のニ >

出典：【NNNドキュメント】メガソーラーと希少生物の命 釧路湿原を脅かすエネルギーの課題 NNNセレクション



“光害”問題も 共存共栄は？



課題を抱える中で...福島市・先達山メガソーラーが完成 景観悪化や土砂災害への懸念 さらに光害も

出典：福島ニュース [福テレ] 課題を抱える中で...福島市・先達山メガソーラーが完成 景観悪化や土砂災害への懸念 さらには光害も

1. 再エネ導入と合意形成：なぜ再エネ導入が進まないのか？

99

集落はなぜ共有地をメガソーラー事業に供する意思決定を行ったのか

——霧ヶ峰麓の環境史・開発史からの考察——

茅 野 恒 秀（信州大学人文学部）

キーワード：メガソーラー、共有地、牧野農業協同組合、霧ヶ峰、環境史

Why did the local community make the decision to use the rights-of-common land for a commercial mega-solar project?

: A consideration from the environmental history and development history of Kirigamine-Highland.

Tsunehide Chino (Faculty of Arts, Shinshu University)

Key Words: Commercial Mega-Solar Project, the rights-of-common land, specialized agricultural cooperative, Kirigamine-Highland, environmental history

【要旨】

日本各地に再生可能エネルギーが急拡大するとともに「メガソーラー」の存在が定着しつつある。しかし、とりわけ山林開発を伴う事業をめぐって社会紛争が増え、推進側と反対側、そして土地所有者との間での社会的亀裂を生じさせている事業も少なくない。

本稿は、全国のメガソーラー問題の多くが、共有地の性格を有してきた土地に外来型開発として計画・建設されていることに着目し、地租改正や農地改革など近代土地所有制度の確立過程、そして高度成長期・バブル経済期の国土開発など、土地問題を規定する政策や動向の連続線上にメガソーラー問題を位置づける。そのための方法として、まず立地地域における人と自然との関係を規定してきた環境史・開発史を明らかにし、その知見をもとに問題を分析した。

長野県諏訪市四賀に計画されている長野県下最大級のメガソーラー事業は、近世以来の入会林野・牧野を戦後に分割解放した土地に計画された。この事業を事例に、土地所有者である地元牧野農業協同組合を取り巻く社会的状況の分析を行い、牧野から林野へ、そして観光開発へと資源利用の転換が起こる中で旧来より山元として有していた地位がごとく裏面に出た結果として、メガソーラー事業への土地売却が企図されたことが推論できた。

メガソーラー問題は繰り返されてきた土地利用の問題

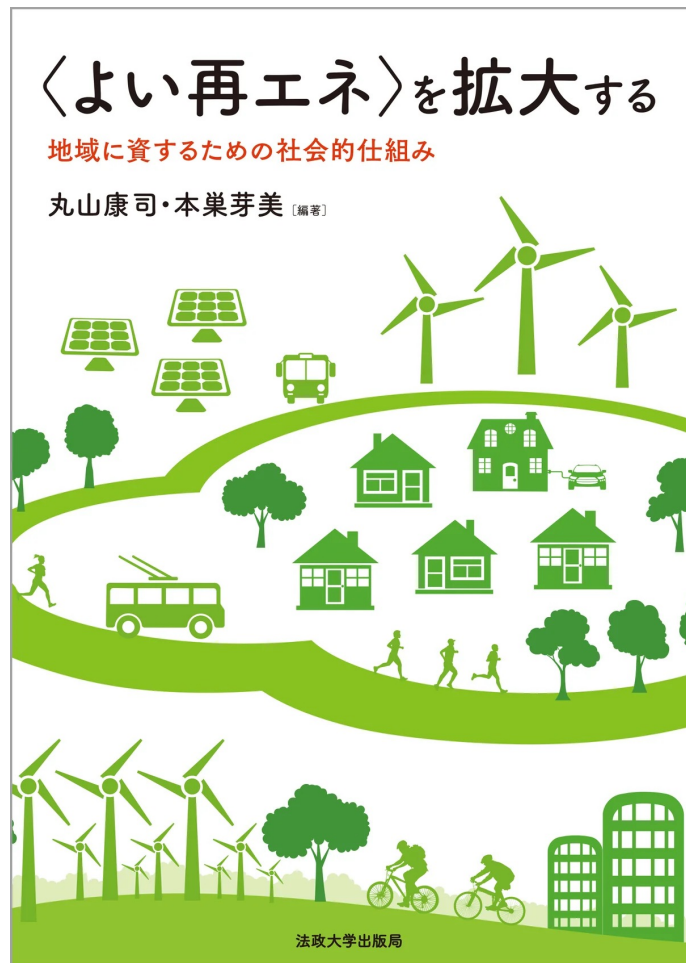
茅野恒秀（2020）「集落はなぜ共有地をメガソーラー事業に供する意思決定を行ったのか——霧ヶ峰麓の環境史・開発史からの考察」信州大学人文科学論集。

- 近世以来の入会林野・牧野などの共有地は、地租改正や農地改革など近代的土地所有制度の確立過程の中で、その所有形態と利用形態を変えながら今日まで続いてきた土地問題の舞台である
- 1960年代以降、林業不振のもとで共有地はゴルフ場・別荘地・リゾート開発など外来型の土地開発に繰り返し供され、観光開発というかたちで資源利用の転換が進んできた
- 2010年代に登場したメガソーラー事業は、こうした近代以降の土地政策・開発史がもたらした土地問題の「帰結」として現れた新たな土地開発手段であり、歴史的に繰り返されてきた共有地利用の問題が現代的形態で表出したものと位置づけられる

1. 再エネ導入と合意形成：よくある失敗・誤解・ミスコミュニケーション

- 地域の幅広いステークホルダーとのかかわりをもたずにつくる事業計画
 - 地域にとってのメリットが不明、認識すべきリスクが把握できていない
- 説得もしくは手続きのための説明会
 - 「法令に則って適切に進めてまいります。」
- 事業者の素性がわからない
 - ネットで検索しても登記の住所情報ぐらいしかない（似た名前の合同会社がいくつもある...!）
- 行政への不信
 - 望ましくない事業を止めてくれない（法律や権限がないので止めたくても止められない...!）

1. 再エネ導入と合意形成：＜よい再エネ＞をめざす



多様な便益を同時に実現するのが＜よい再エネ＞

丸山康司・本巢芽美 編 (2024) 『＜よい再エネ＞を拡大する——地域に資するための社会的仕組み』法政大学出版局。

- 「被害」の複雑さと規制の難しさ：明確な閾値を設定することが困難な現象には規制的アプローチは有効ではない（風車の音、影、景観等）
- 価値判断をとまなう課題は、行政や専門家だけでは決められない：丁寧なコミュニケーションと段階を踏んだ合意形成が必要になる
- 地域の現在～将来に明確な便益をもたらす＜よい再エネ＞をステークホルダーで協議・定義し、多様なかたちで積極的な支持が得られる状態をつくり出す
 - 自然再生、生物多様性保全、地域経済循環、地域振興・福祉、災害時対応 etc.

1. 再エネ導入と合意形成：＜よい再エネ＞をめざす

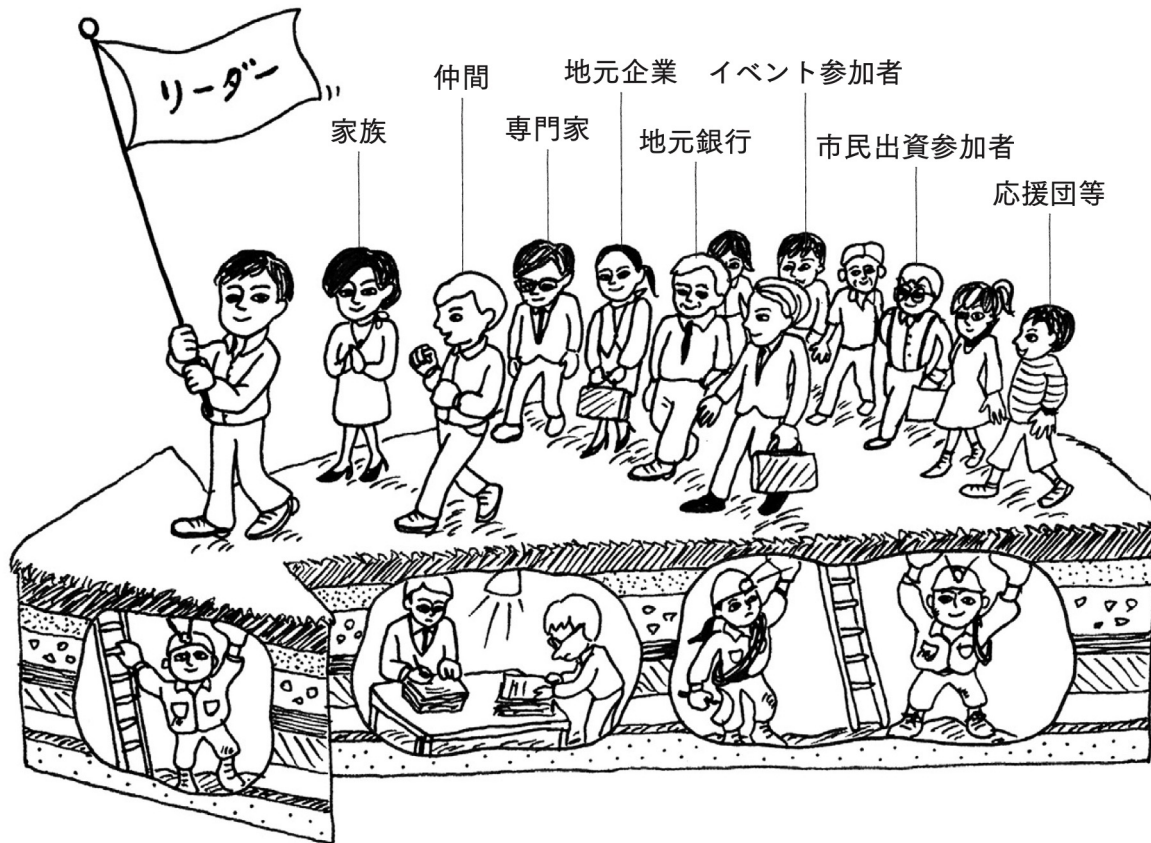
コミュニティパワーの三原則

1. 地域の利害関係者がプロジェクトの大半もしくはすべてを所有している
2. プロジェクトの意思決定は地域に基礎をおく組織によっておこなわれる
3. 社会的・経済的便益の多数もしくはすべては地域に分配される

※この3つの基準の内、少なくとも2つを満たすプロジェクトは「コミュニティパワー」として定義される

出典：世界風力エネルギー協会 コミュニティパワー・ワーキング・グループ

1. 再エネ導入と合意形成



出典：飯田哲也＋ISEP（2014）『コミュニティパワー——エネルギーで地域を豊かにする』学芸出版社。』

- 合意 = 全員一致ではない
 - 積極的支援／消極的支持／受動的容認／積極的反対 のグラデーション
 - 少なくとも積極的な反対がなく、積極的な支援が一定程度ある状態
- 早期の情報共有
 - 「そんな話、私は聞いてない！」
- きめ細かい利害の把握と調整
- 意思決定プロセスへの参加
 - 中心メンバーで深く掘り下げて決めるべきこと、幅広く声を集めた上で決めるべきこと etc.

どれだけ導入するか？

- https://policies.env.go.jp/policy/roadmap/local_keikaku/kuki/karte.html

- 自治体再エネカルテ

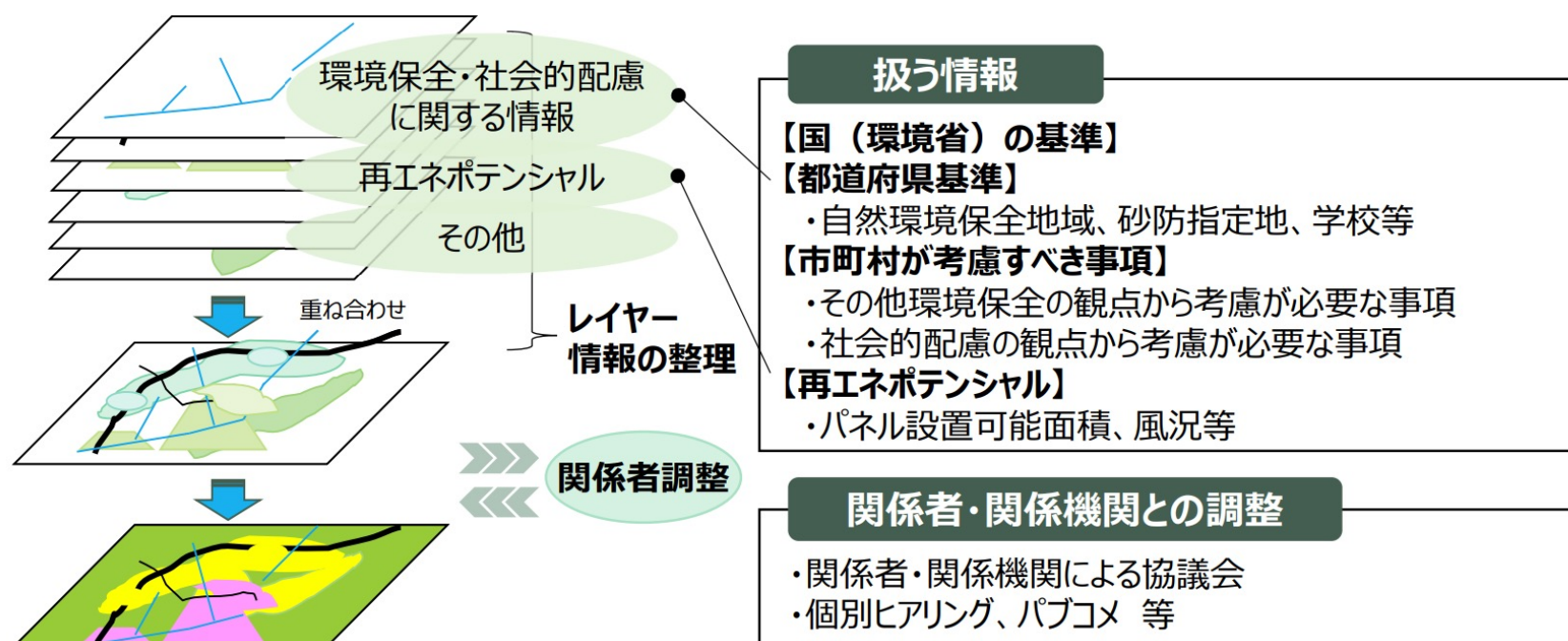
に導入するか？

→ 再エネゾーニング

12

3. 北海道浦幌町における再エネゾーニングとプロセス

- ・ 再エネの導入にあたって、資源量や法規制、環境・社会情報を地図上で重ね、整理することで、事業の立地を空間的に制御する



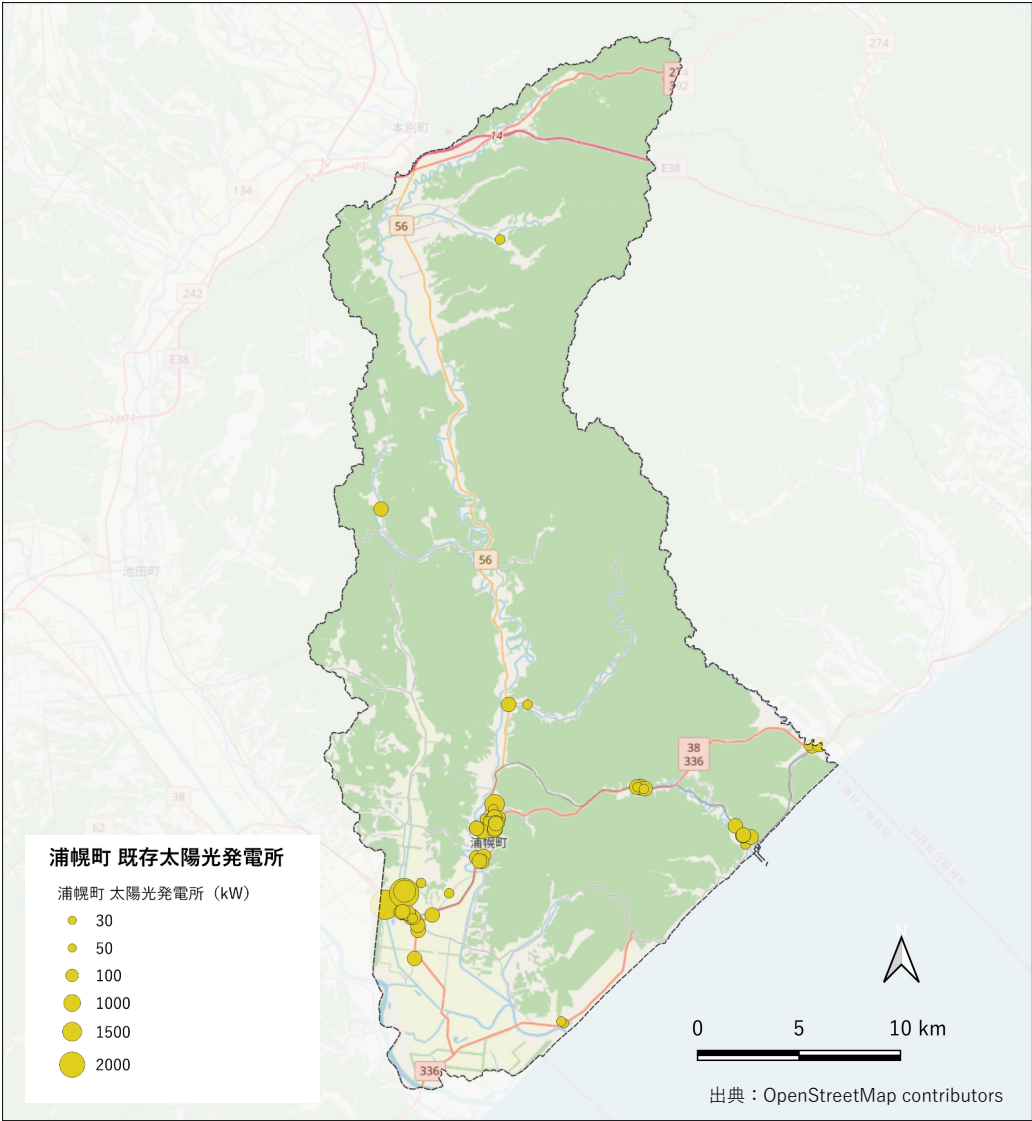
出典：地域脱炭素のための促進区域設定等に向けたハンドブック

3. 北海道浦幌町における再エネゾーニングとプロセス

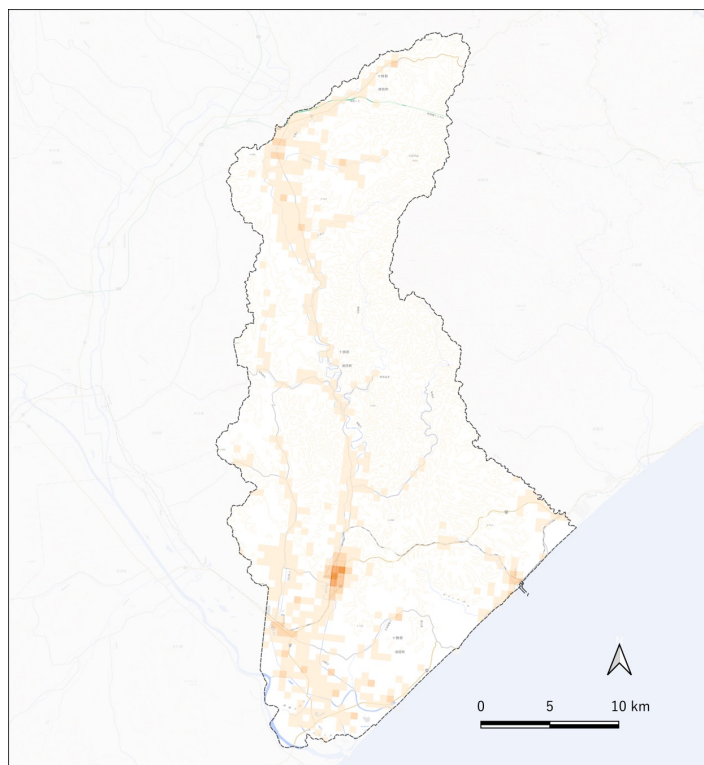
- 2023年度 町長の主導で「ゼロカーボンシティ宣言」
 - 2050年までにゼロカーボンを実現する → 再エネ100%をめざす
- 2024年度 温暖化対策実行計画 区域施策編の策定（並行して地域エネルギー事業主体の形成 → うらほろエネルギー設立）
 - 6/5 まちづくり講演会での参加者コメント
 - 「地域でエネルギー自立できたらいいけど... できるのか？ どうやってやる？ 具体的なアクション？」
 - 「畑、山、海は食べ物をつくる現場なので、再エネの開発には、ちょっともやもやする」
 - 「頭では理解できているが、体・気持ちがついていかない」
 - 「太陽光発電が急に増えた、浦幌高校のグラウンドにはネガティブな感じがした」
 - 10月～3月 再エネゾーニング検討準備会を3回開催
 - 町立博物館学芸員、ラポロアイヌネイション会長、信州大学准教授、東京科学大学准教授、日本自然保護協会、北海道環境財団
 - 町内の太陽光・風力のポテンシャル、保全すべき自然や歴史的スポットなどを確認
- 2025年 環境省 再生可能エネルギー促進区域等ゾーニング事業
 - 浦幌町まちづくり政策課、町立博物館、ISEPを計画策定チームとしてゾーニングを実施
 - 有識者会議、ステークホルダーインタビュー、町民向けセミナー・ワークショップ、町内の大事な場所 参加型調査

レイヤー情報を集めて要素マップをつくる

区分	要素マップ
環境保全等法令	保安林
環境保全等法令	鳥獣保護区
環境保全等法令	埋蔵文化財包蔵地
環境保全等法令	町指定文化財
環境保全等法令	廃棄物が地下にある土地に係る指定区域
環境保全情報	絶滅危惧種
環境保全情報	現存植生図2024
環境保全情報	KBA（生物多様性重要地域）
環境保全情報	IBA（重要野鳥生息地）
環境保全情報	巨樹・巨木
環境保全情報	河川
環境保全情報	風力発電における鳥類センシティブティマップ
土地安定性情報	砂防指定地・砂防ダム
土地安定性情報	土砂災害警戒区域
土地安定性情報	土砂災害特別警戒区域（急傾斜地、土石流、地滑り防止区域）
土地安定性情報	急傾斜地崩壊危険区域
土地安定性情報	洪水浸水予測図
土地安定性情報	津波浸水想定区域（3m以上）
土地利用方法情報	地域森林計画対象民有林
土地利用方法情報	海岸保全区域
土地利用方法情報	漁港区域
土地利用方法情報	用途地域
土地利用方法情報	建物
土地利用方法情報	道路
土地利用方法情報	鉄道
土地利用方法情報	農用地区域
土地利用方法情報	都市公園
土地利用方法情報	公共下水道供給開始区域
生活環境情報	騒音・振動規制区域
事業性情報	最大傾斜角度 20℃以上
事業性情報	最大傾斜角度 30℃以上



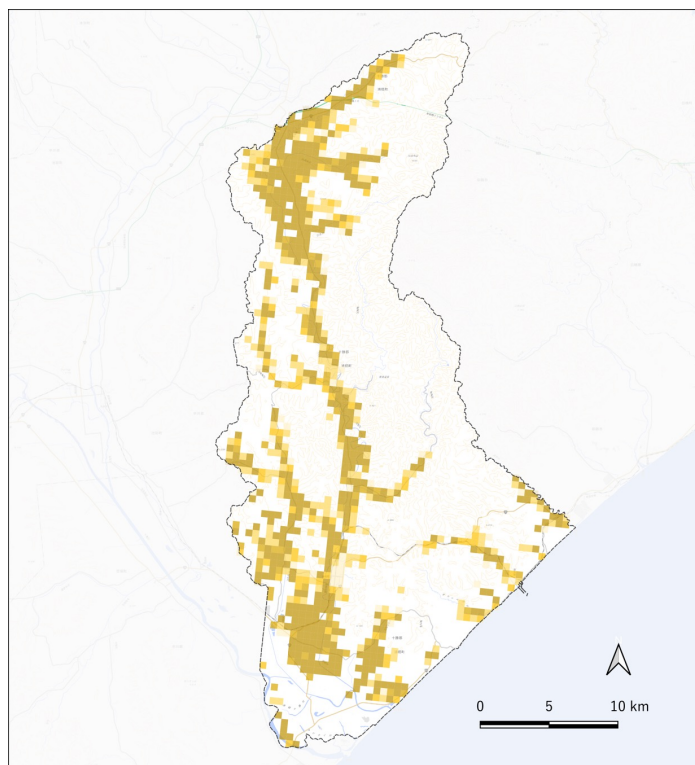
浦幌町の再エネポテンシャル（太陽光 建物／土地、風力）



浦幌町 太陽光発電ポテンシャル（建物）

太陽光発電ポテンシャル（建物）

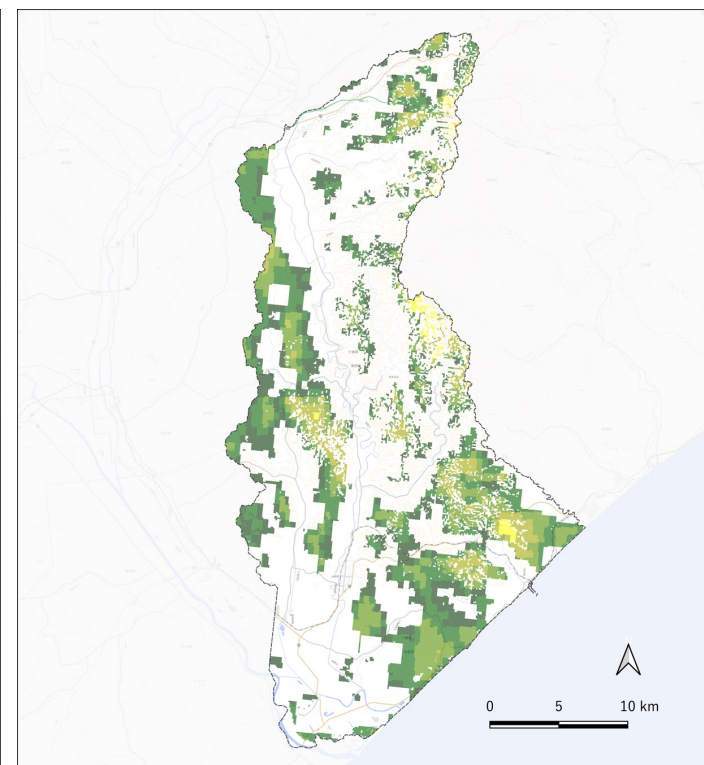
- 1,000kW/k㎡ 未満
- 1,000 - 5,000kW/k㎡
- 5,000 - 7,500kW/k㎡
- 7,500 - 10,000kW/k㎡
- 10,000kW/k㎡ 以上



浦幌町 太陽光発電ポテンシャル（土地）

太陽光発電ポテンシャル（土地）

- 1,000kW/k㎡ 未満
- 1,000 - 5,000kW/k㎡
- 5,000 - 7,500kW/k㎡
- 7,500 - 10,000kW/k㎡
- 10,000kW/k㎡ 以上



浦幌町 風力発電ポテンシャル

風力発電ポテンシャル

- 5.5 - 6.0m/s
- 6.0 - 6.5m/s
- 6.5 - 7.0m/s
- 7.0 - 7.5m/s
- 7.5 - 8.0m/s
- 8.0 - 8.5m/s

出典：国土地理院 地理院地図

3. 北海道浦幌町における再エネゾーニングとプロセス

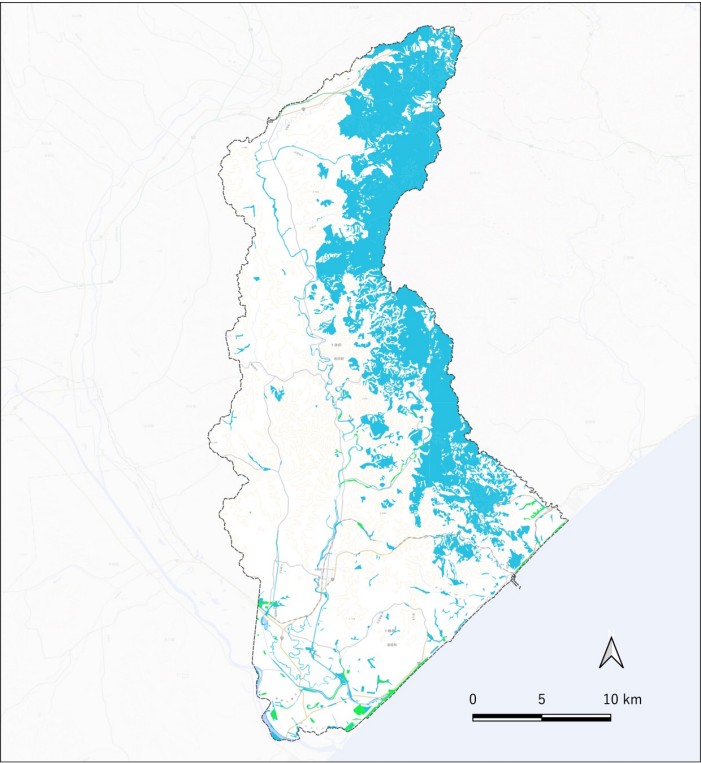
浦幌町では、以下の3つのエリア区分でゾーニングマップを作成

保全エリア：再エネ導入を抑制するエリア

調整エリア：各種制約を踏まえて再エネ導入を検討することが可能なエリア

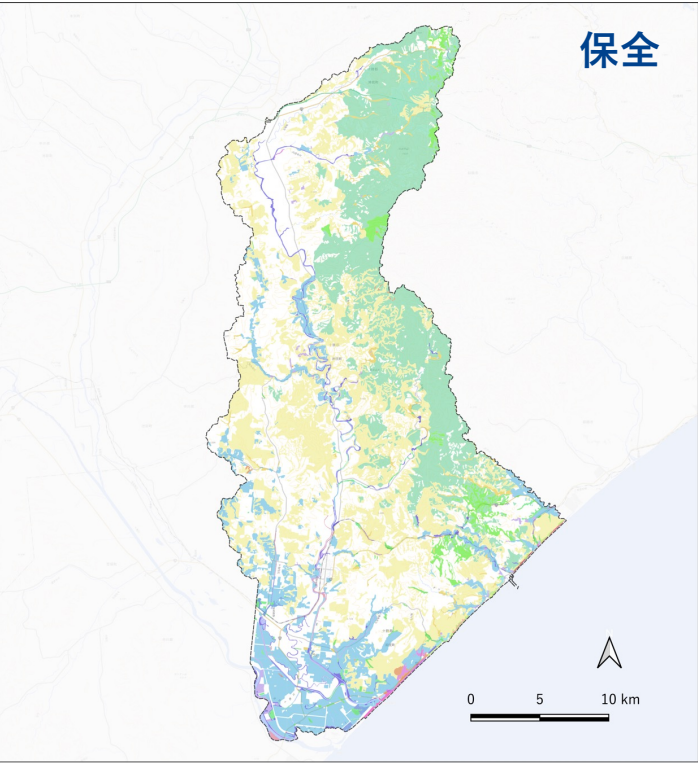
促進エリア：特定の条件のもとで積極的に再エネ導入を検討することが可能なエリア

植生自然度 → 植生群落単位で保全・調整を選択



浦幌町 現存植生図2024 植生自然度

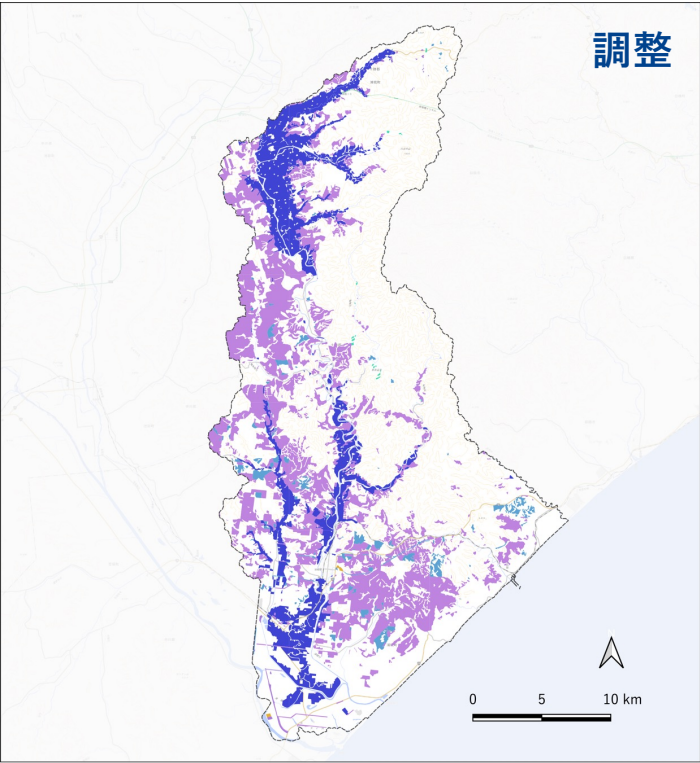
植生自然度9～10
10
9



浦幌町 現存植生図2024（選択保全）

現存植生図2024 凡例名

エゾイタヤミズナ群落	シラカンバミズナ群落	ハマハタザオエゾノスサキ群落
オオコモギ群落	トドマツミズナ群落	ハルニレ群落
カシ群落 (IV)	トドマツ群落 (疎林)	ハンノキヤチダマ群落
カシ群落 (V)	ナガボノシロフレモコウエゾミヤコザ群落	ハンノキ群落 (IV)
ササシラカンバ群落	スマガサオダマ	ヒルムシロクラス
ササ群落 (V)	ハマオトコヨモギコハマギ群落	ミヤコザ群落
	ハマニンニクコウボウム群落	



浦幌町 現存植生図2024（選択調整）

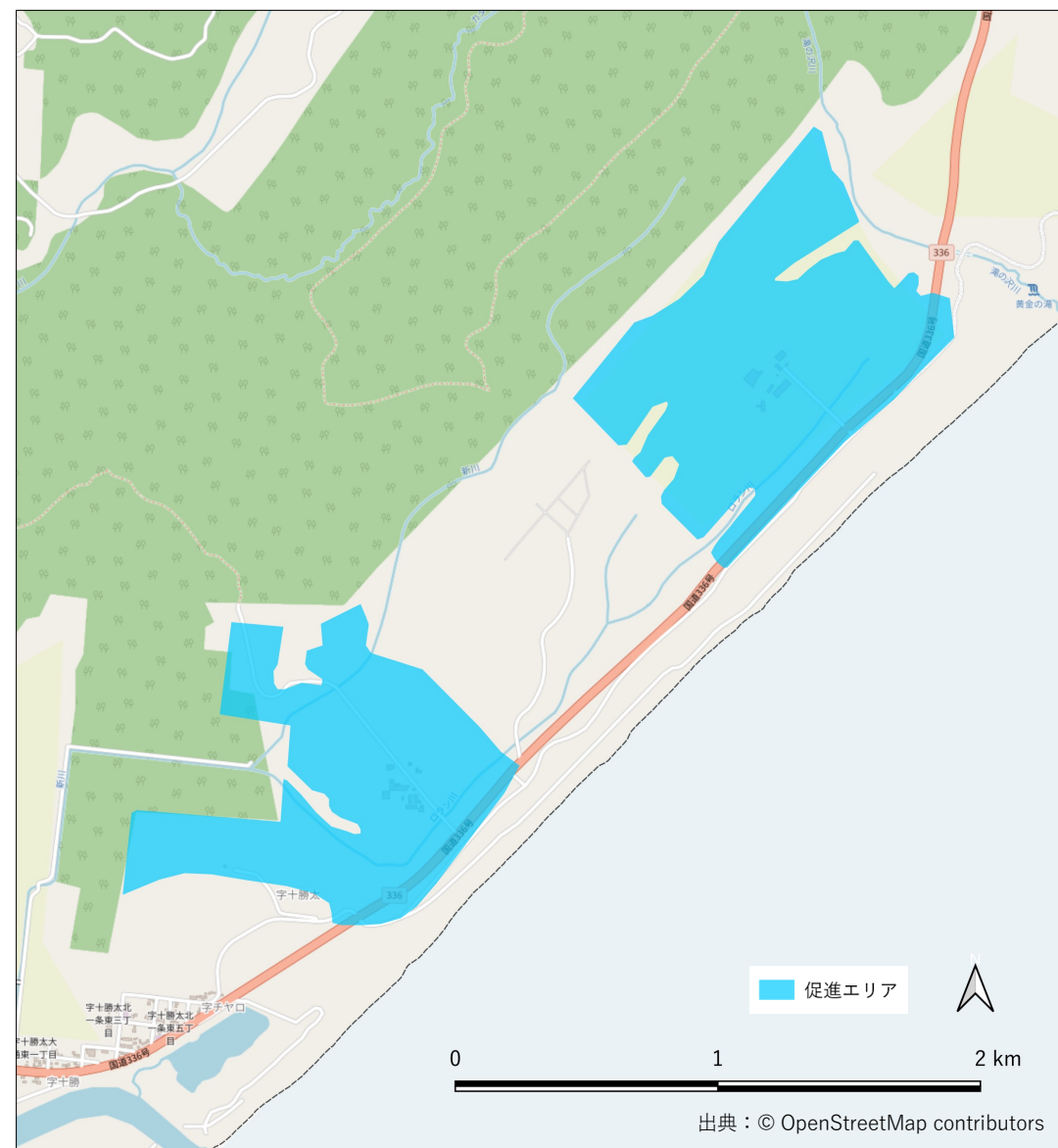
現存植生図 2024 凡例名

アカエゾマツ植林
カラマツ植林
ゴルフ場・芝地
焼畑草群落
伐採跡地群落 (V)
開伐・空地雑草群落

出典：国土地理院 地理院地図

太陽光 土地 促進エリア

- ・ 浦幌町では、主要産業である農業・畜産業において、野生のエゾシカやヒグマが農場や牧場に入り、農作物への被害が発生している。特に模範牧場では、エゾシカが入り込むことが牛への病原菌伝染のリスクとなることから、防護柵の設置も検討されてきたが、財政的な事情もあり、対策を進めることができなかった。これに関して、垂直型太陽光発電をエゾシカの防護柵としての機能も兼ねて導入することができれば、再エネ発電を行うと同時に獣害の発生防止を期待することができる。
- ・ また、近年、夏季の気温上昇が牛の育成に影響しており、強い日射の緩和の必要性も検討されている。これに関しても、地面から高所に設置する営農型太陽光発電を牧場内で限定的設置し、庇としての機能を兼ねて導入することができれば、再エネ発電と酪農の課題解決を同時に実現させることが期待できる。
- ・ このような、再エネ導入と地域の課題解決をつなげ、複数の便益を生み出す「コベネフィット」の考え方にもとづく取り組みは、浦幌町において積極的に促進する意義があると考えられる。
- ・ 以上の検討を踏まえ、浦幌町では、コミュニティパワーの三原則の考え方にもとづく事業主体・ビジネスモデルを前提とし、再エネ利用によるコベネフィット（農地の保全、野生生物とのバッファー等）の実現を、促進エリアの基本的な考え方とした。その上で、これらを期待することができるエリアを促進エリアとして選定した。
- ・ この促進エリアは、一般的な地上設置型の太陽光発電の促進ではない。



太陽光 土地 促進エリア 事業イメージ

垂直型太陽光発電



写真：二本松ご当地エネルギーをみんなで考える株式会社（福島県）

営農型太陽光発電



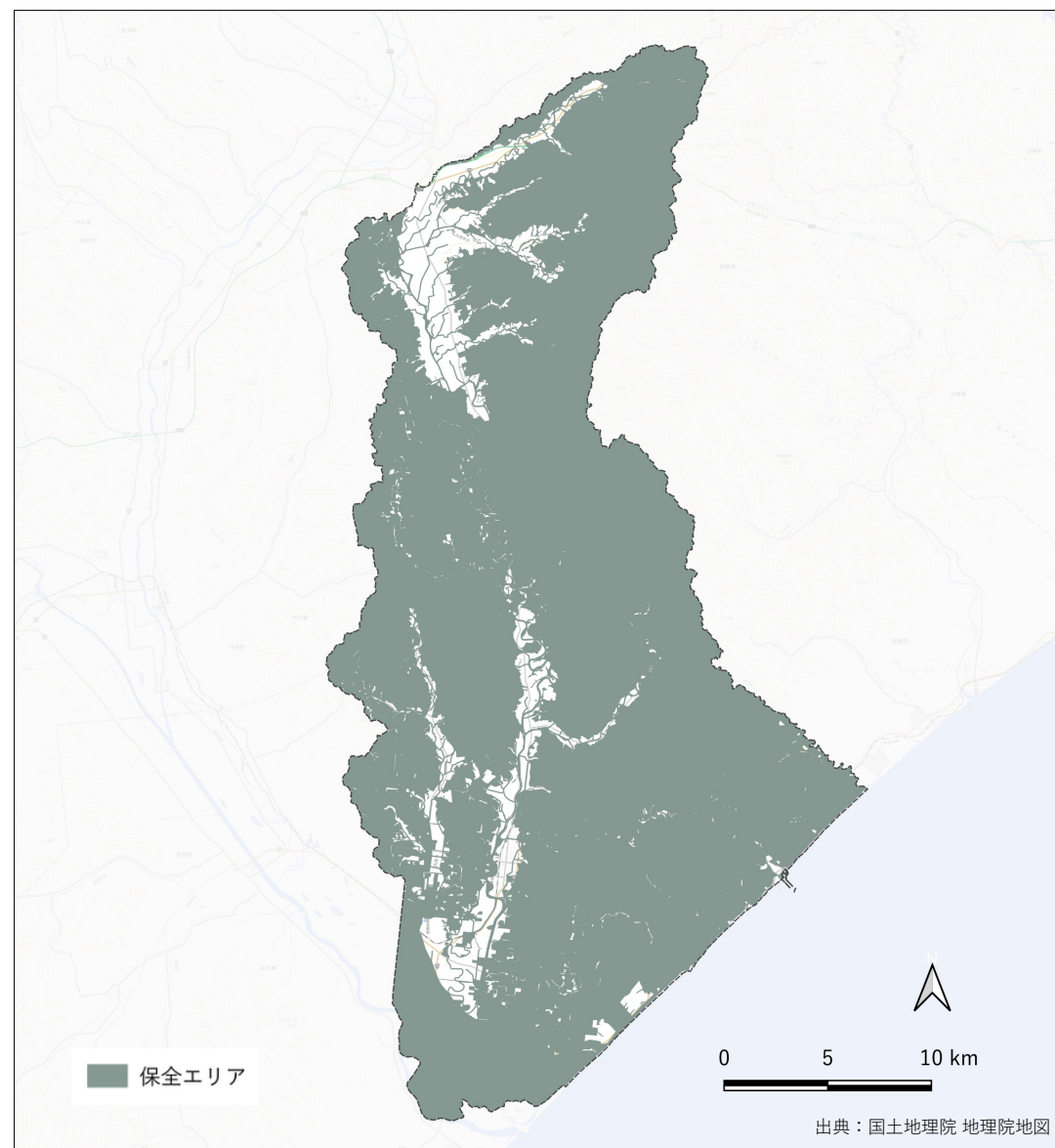
写真：二本松営農ソーラー株式会社（福島県）

太陽光発電 建物 ゾーニングマップ

保全レイヤ（19）

- ・ 保安林
- ・ 鳥獣保護区
- ・ 埋蔵文化財包蔵地
- ・ 町指定文化財
- ・ 廃棄物が地下にある土地に係る指定区域
- ・ 絶滅危惧種
- ・ 現存植生図2024（選択保全）
- ・ KBA（生物多様性重要地域）
- ・ IBA（重要野鳥生息地）
- ・ 巨樹・巨木
- ・ 河川から30mの範囲
- ・ 砂防指定地・砂防ダム
- ・ 土砂災害警戒区域
- ・ 土砂災害特別警戒区域（急傾斜地、土石流、地滑り防止区域）
- ・ 急傾斜地崩壊危険区域
- ・ 地域森林計画対象民有林
- ・ 海岸保全区域
- ・ 漁港区域
- ・ 最大傾斜角度 30℃以上

保全エリアを除く町内全域＝白地エリアでは、建物での太陽光発電は特段の制約なく導入を進めることが可能です。



太陽光発電 土地 ゾーニングマップ

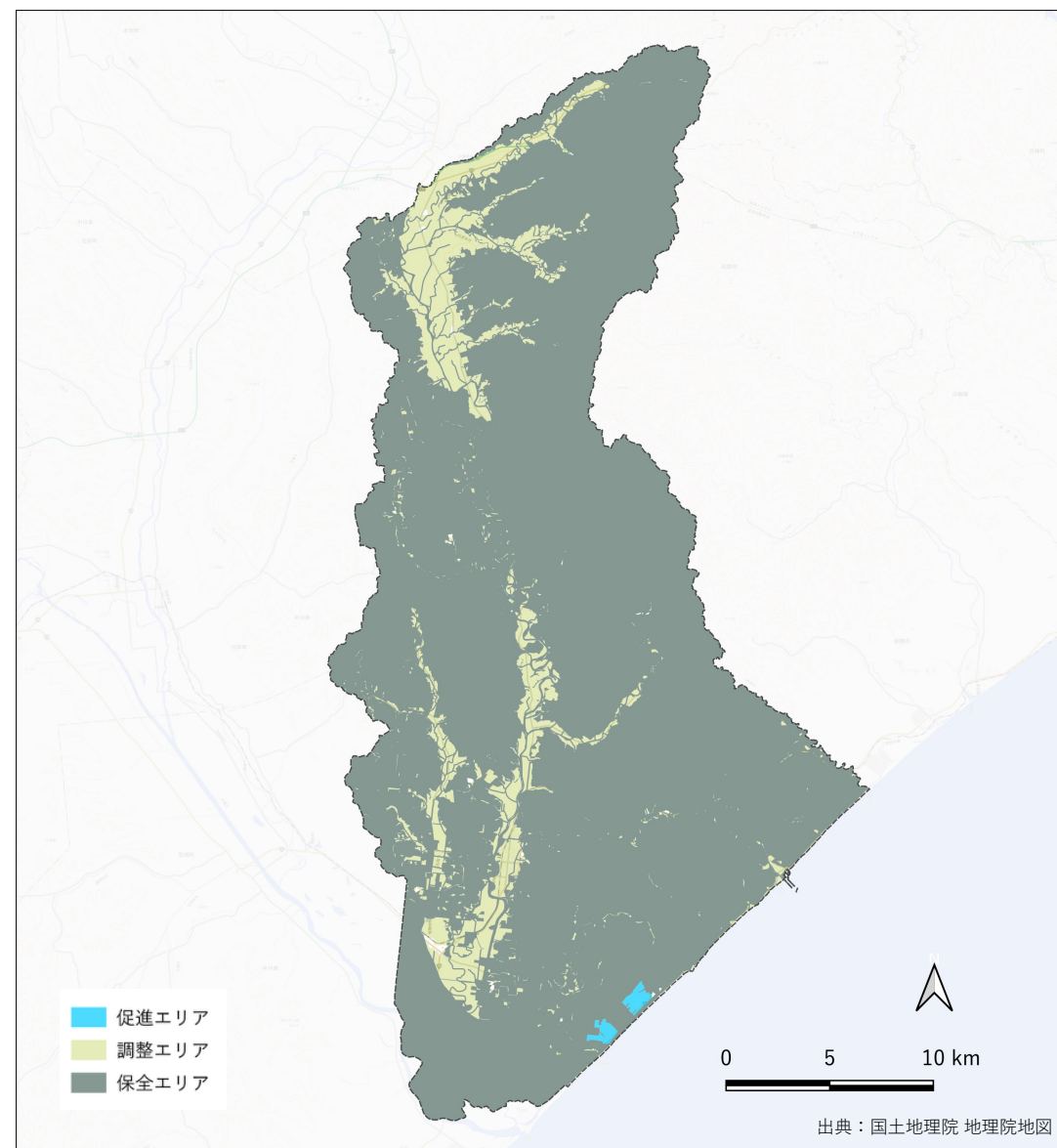
保全レイヤ（19）

- ・ 保安林
- ・ 鳥獣保護区
- ・ 埋蔵文化財包蔵地
- ・ 町指定文化財
- ・ 廃棄物が地下にある土地に係る指定区域
- ・ 絶滅危惧種
- ・ 現存植生図2024（選択保全）
- ・ KBA（生物多様性重要地域）
- ・ IBA（重要野鳥生息地）
- ・ 巨樹・巨木
- ・ 河川から30mの範囲
- ・ 砂防指定地・砂防ダム
- ・ 土砂災害警戒区域
- ・ 土砂災害特別警戒区域（急傾斜地、土石流、地滑り防止区域）
- ・ 急傾斜地崩壊危険区域
- ・ 地域森林計画対象民有林
- ・ 海岸保全区域
- ・ 漁港区域
- ・ 最大傾斜角度 30℃以上

調整レイヤ（9）

- ・ 現存植生図2024（選択調整）
- ・ 洪水浸水予測図 想定最大規模
- ・ 洪水浸水予測図 計画規模
- ・ 津波浸水想定区域（3m以上）
- ・ 農用地区域
- ・ 都市公園
- ・ 公共下水道供給開始区域
- ・ 鉄道から30mの範囲
- ・ 騒音・振動規制区域

促進エリアでの太陽光発電は、コミュニティパワーの三原則の考え方にもとづく事業主体・ビジネスモデルを前提として、このエリアの課題解決につながる垂直型太陽光発電および営農型太陽光発電を条件とします（一般的な地上設置型の太陽光発電の促進ではありません）。



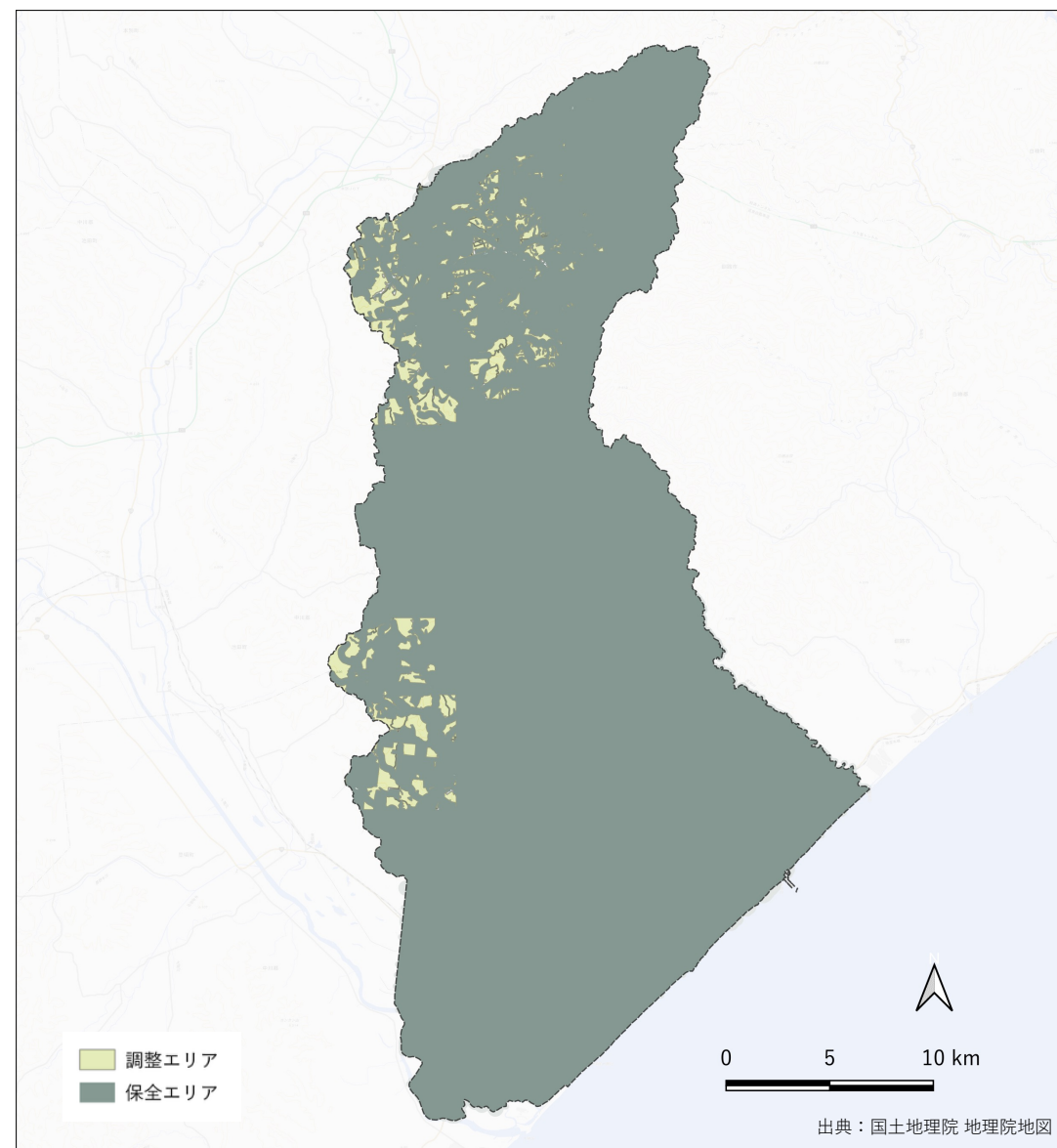
風力発電 ゾーニングマップ

保全レイヤ (20)

- ・ 保安林
- ・ 鳥獣保護区
- ・ 埋蔵文化財包蔵地
- ・ 町指定文化財
- ・ 廃棄物が地下にある土地に係る指定区域
- ・ 絶滅危惧種
- ・ 現存植生図2024 (選択保全)
- ・ KBA (生物多様性重要地域)
- ・ IBA (重要野鳥生息地)
- ・ 巨樹・巨木
- ・ 河川から200mの範囲
- ・ 風力発電における鳥類センシティビティマップ (注意喚起レベルA3、B)
- ・ 風力発電における鳥類センシティビティマップ (飛来地ランク 1)
- ・ 砂防指定地・砂防ダム
- ・ 土砂災害警戒区域
- ・ 土砂災害特別警戒区域 (急傾斜地、土石流、地滑り防止区域)
- ・ 急傾斜地崩壊危険区域
- ・ 海岸保全区域
- ・ 漁港区域
- ・ 最大傾斜角度 20°C以上

調整レイヤ (6)

- ・ 現存植生図2024 (選択調整)
- ・ 洪水浸水予測図 想定最大規模
- ・ 洪水浸水予測図 計画規模
- ・ 津波浸水想定区域 (3m以上)
- ・ 農用地区域
- ・ 地域森林計画対象民有林



ゾーニング後の太陽光発電（建物・土地）と風力発電の導入ポテンシャル

	太陽光発電（建物）	太陽光発電（土地）	風力発電
総導入ポテンシャル	設備容量：64MW 発電電力量：86,693MWh/年	設備容量：3,037MW 発電電力量：4,017,151MWh/年	設備容量：2,510MW 発電電力量：5,495,693MWh/年
保全エリア除外後の 残存ポテンシャル	設備容量：34MW 発電電力量：46,708MWh/年	—	—
保全エリア除外後の 調整エリア内の残存 ポテンシャル	—	設備容量：1,364MW 発電電力量：1,804,670MWh/年	設備容量：1.5MW 発電電力量：3,325MWh/年
促進エリアポテン シャル（参考値※）	—	設備容量：16MW 発電電力量：21,727MWh/年	—
本町の年間電力需要 （33,714MWh/年） に対する割合	138%	調整エリア：5,353% 促進エリア：64.4%	9.9%

※ この数値は、面積からの推計であり、促進エリアで想定する垂直型太陽光発電および営農型太陽光発電の設備容量・発電電力量とは異なる。そのため、促進エリア内のポテンシャルはあくまで参考値として参照する。

3. 北海道浦幌町における再エネゾーニングとプロセス

浦幌町 大事な場所マッピング



大事な場所

個人的に大事な場所、地域にとって大事な場所について、その場所の名前と理由を記入して下さい。写真は任意でアップロードできます（写真なしでも登録可能です）。

登録済み: 0/5件

まだ場所が登録されていません
地図を右クリックして場所を追加してください
最大5件まで登録できます

[ログイン](#) [アカウント作成](#)

町内の大事な場所 参加型調査

- 住民が個人的に大事にしている場所、地域にとって大事だと考える場所をオンラインで投稿してもらう
- AIでWebアプリとして作成
- 住民向けセミナー＆ワークショップ「うらほろエネルギーアクション」や町の広報を通じて呼びかけ

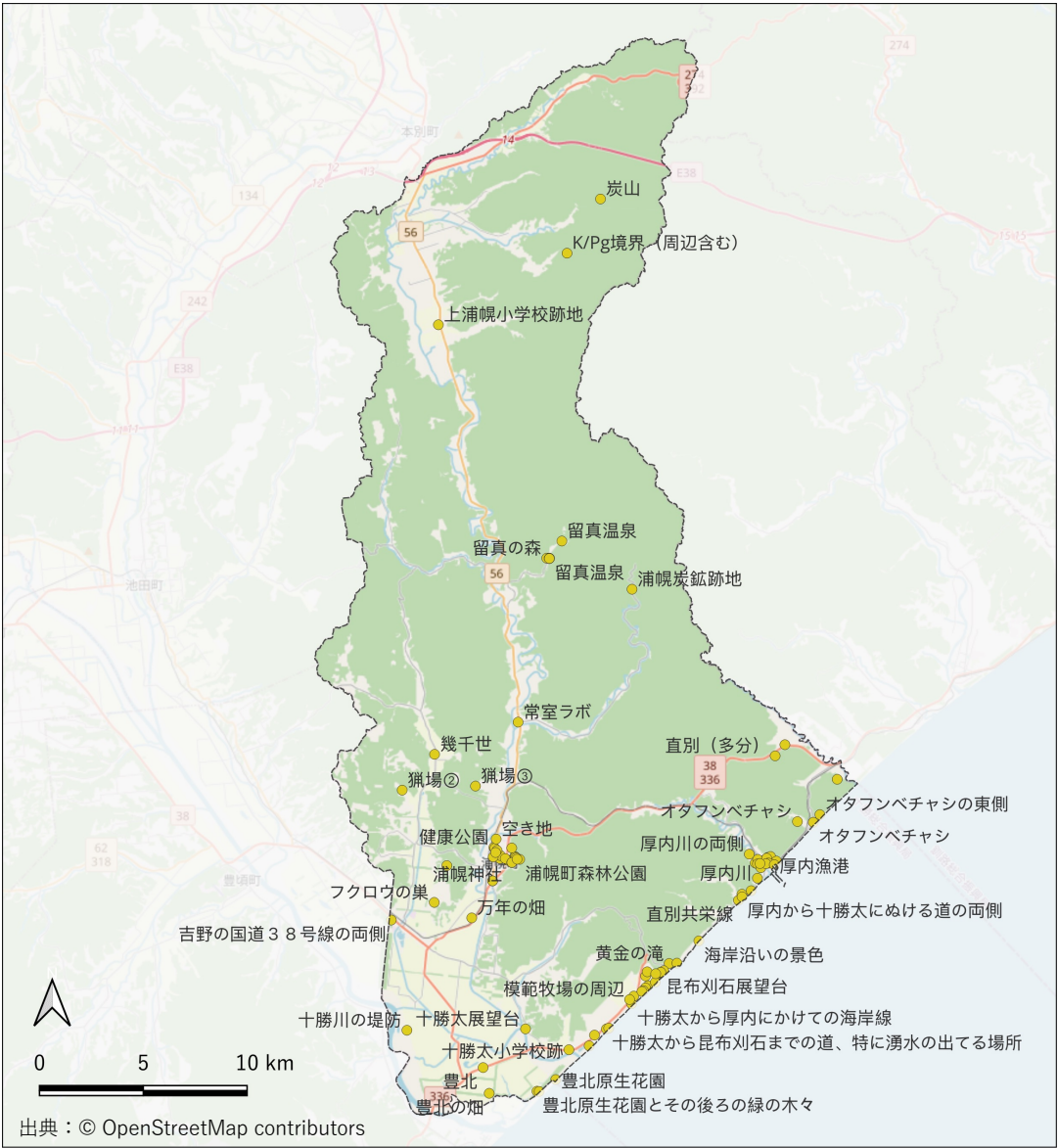
町内の大事な場所 参加型調査

- 調査方法：オンラインマップ投稿
- 調査期間：2025年9月～12月
- 参加人数：37人
- 地点数合計：112件
 - 公開 104件、非公開 8件

カテゴリ	件数	割合	主な特徴
自然景観	55	52.9%	雄大な海岸線、展望台、草原
文化遺産	29	27.9%	歴史的建造物、アイヌ文化
地理情報	21	20.2%	地形、地質、水資源
レクリエーション	18	17.3%	ドライブ、散歩、写真撮影
植物・花	17	16.3%	季節の花々、希少植物
野生動物	14	13.5%	珍しい野鳥、湿地生物
環境問題	10	9.6%	ソーラーパネル、景観保全
その他	29	27.9%	温泉、跡地、その他施設

各地点とコメントは、Web上で見るができます。

[🗺️ https://urahoro-mapping-card.bolt.host/](https://urahoro-mapping-card.bolt.host/)



出典：© OpenStreetMap contributors

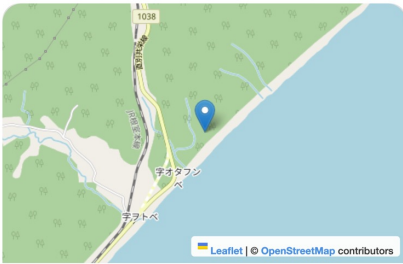


エリア：昆布刈石・意岩周辺

昆布刈石展望台

きれいな景色を守りたい

景観・自然



エリア：昆布刈石・意岩周辺

オタフンベチャシの東側

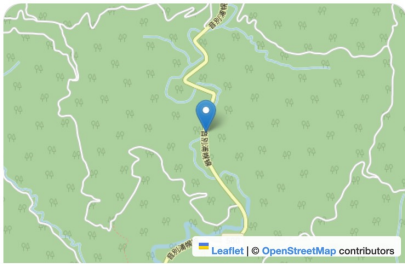
映画北のざ口年の口ケ地です。あの砂浜に大衆の人がエキストラでいて、その中に吉永小百合さんが来てくれてビックリしたのを思い出します。普段は人のあまり入らない場所ですが、少し海岸を歩いてから小川沿いに直別方向に歩くと、珍しい植物がみられます。山菜もとれます。オタフンベチャシの周辺の道路は映画ハナミズキの口ケ地でもあります。厚内公民館にガッキーが来ると後から聞いて残念がったのも思い出です

景観・自然

植物・花

文化・歴史

観光・レクリエーション



エリア：直別・吉野周辺

浦幌炭鉱跡地

かつての町の産業（鉱業）の歴史を残す場所のため。

文化・歴史

生活・地域



エリア：その他

模範牧場の周辺

昔ここに住んでいました。子育てもここでしました。近所には我が家ともう一軒しかありませんでした。よく寂しくないか？とか不便でないか？と聞かれましたが、周り一面自然しかなく、子供たちをノビノビ育てることができました。大草原の小さな家みたいだねと言われることもありました。都会の人は結構あこがれるみたいで、こんなところに宿泊施設やワーキングスペースがあったら結構泊まる人がいると思います。こんな自然は守ってほしいです

景観・自然

生活・地域



豊北原生花園

この花は本州では高山植物で、海辺に咲く高山植物という珍しい景色だそうです。原生花園の入り口のワタスゲも地味な花ですが、浜中町の霧多布湿原ではこの花を見るために本州から観光客が来るのだそうです。浦幌も上手にアピールできれば観光スポットになるのではないのでしょうか。

原生花園の海とは反対側に広がる林？緑たちは海風から畑を守り、乾燥を防いでくれているのだそうです。こんな自然の景色は守って伝えてほしいです。

景観・自然

植物・花

観光・レクリエーション

生活・地域



エリア：その他

十勝川の堤防

自転車で走ると楽しい

その他

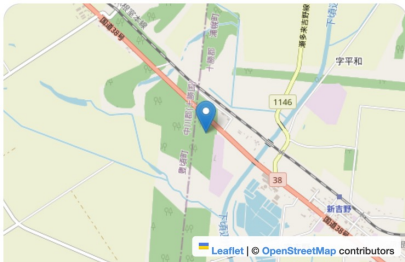


エリア：その他

猟場①

鹿駆除見回り箇所

その他



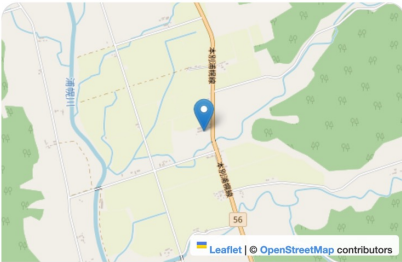
エリア：その他

吉野の国道38号線の両側

すでに一部でソーラーパネルが経っていますが、とてもショックでした。走っていて気持ちのいい道だよねと子どもたちや本州から来るお客さんたちに褒められる景色だったので。あるものを壊してほしいと言いますが、増やさないでほしいと思います。

景観・自然

環境問題

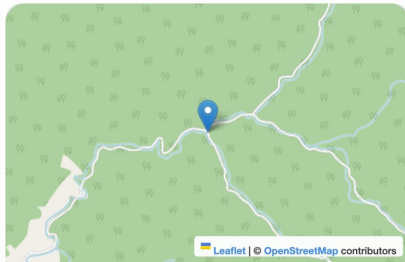


エリア：その他

上浦幌小学校跡地

思い出の地

その他



エリア：その他

炭山

祖父母・父が住んでいたの

その他

4. まとめと今後の課題

- 再エネ普及の基本的な意義は多くの人が理解しているが、具体的にどれぐらい、どこに導入するかについては、地域で具体的に考えていく必要がある
 - 将来のゴールを決めることと、過去の土地利用の歴史を振り返っておくことが非常に重要になる
- 多様な便益を同時に実現する＜よい再エネ＞は、地域によって異なるので、幅広いステークホルダーとの対話・コミュニケーションのもとで定義していく
 - 事業主体・ビジネスモデルとしては、コミュニティパワーがひとつのお手本
- 再エネゾーニングは、自治体が主体的に土地・空間の利用を制御することができる手法であり、その作成プロセスを通じてステークホルダーとのコミュニケーションを進める機会にもなる
 - 地域にとって望ましい事業主体・ビジネスモデルを促進エリアの立地条件として設定する
- ただし、マップをつくるだけでは法的拘束力がないので、条例と紐付けるなど、公式にガバナンスに組み込んでいくことも検討する必要がある
- さらに、自然・社会環境、インフラ等は時間の経過とともに変化するので、自治体がゾーニングマップの見直しを内製できるように、GISのスキルを習得することが望ましい